

校長室だより
NO. 49
平成31年2月4日

すべては光る

梅園小学校長
たか すりょうへい
高 須 亮 平

期待と不安が交錯する「ワクワク感」をもちたい

いよいよ2月、今日は立春です。卒業式が3月20日（水）、修了式が3月22日（金）ですので、3学期はあと1か月半になりました。学力検査（5日・金）やなわとび集会（12日・火）、4年の1/2成人式（20日・火）などが迫ってきています。1つ1つを充実させていくことが、この年度のまとめとなりますので、ちょっとしたワクワク感を持ちます。そんなワクワク感について考えることにします。

ワクワク感と言えば、平成31年のスタートはそんな気持ちでした。5月に年号が変わるので、どんな年号になるのか、また、そのことで日本がどう変わるか、期待と不安が交錯します。まさに「ワクワク感」とは、期待と不安が入り交じった感情のようです。子どもたちの進級・進学するときの気持ち、大人の就職が決まり初出勤の気持ち、初めてのデートの前夜もそうかもしれせん。未来に対する期待と同時に不安があるから緊張するのでしょうか。不安がなかったらただ浮かれているだけに過ぎなくなってしまうから、ほどよくあった方がよいと思います。だから、この「ワクワク感」というものは大切な感情のようです。

今後の教育を考えると、AI（人工知能）の技術はどんどん進化することは十分予想できますので、教育のあり方も変わって当然です。例えば、大学入試が顕著です。学んだ知識をどれだけ暗記できているかで評価される教育は確実に変わることでしょう。思考力・表現力・判断力といった人間でしかできないことが求められるのは、誰もが理解するところです。現に、2020年度から始まる小学校学習指導要領は、これらが軸となっています。そのため、今のままで何とかなるなんていう、これまでの人の生き方もきっと変わることとされます。



1年生活科「こま回し名人になろう」

思考力・表現力・判断力の具体はどんなことか簡単に言いますと、正解のない問題をどう解決できるかを考えるということになります。正解がある問題に対して、できるだけ早くその正解を導き出そうとする情報処理能力は、もう既にAIに取って代わりつつあります。「正解」のない問題に挑み、考え、自分も納得し、周りの人も納得させられる「納得解」を導き出せるかどうか人間の仕事になると思います。

確かに、学校ではこれまでいつも「正解」が設定され、求められてきました。しかし、社会人になると要求されるのは「納得解」がほとんどではないでしょうか。新しい企画を提案するときや新製品を売り出すとき、どのような説明をしたら周りの人に



4年福祉実践教室

納得してもらえるかに頭を使っているのです。

1月中旬、こんなテレビ番組がありました。頭はいいのに、その使い方が分からず彷徨^{さまよ}っている若者「高学歴者ニート」9人に、予備校講師でタレントの林修先生が授業をするという番組（林先生が驚く初耳学!）です。それを興味深く視聴しました。

若者は、いろいろな観点から林先生に意見を言ったり質問したりしていました。その中で、2浪して明治大学に入った男性がこんな話をしました。

「卒業して就職したら、中卒や高卒の子と同じ部署で、同じ待遇だった。浪人時代も含めた6年間は何だったのか。明大卒だったら好きな仕事ができると思っていたのに」

彼は、5か月で退職して今はアルバイト生活をしているということです。

また、慶應義塾大学卒の男性はこう言っていました。

「みんな好きなことをやればいいと思う。生活はカツカツでいいんですよ」

それに対して、林先生はこう言いました。

「カツカツの生活を否定しないけど、そんな生活でも、君が何不自由なく生きられて、しかも公共のサービスを受けられるのは、多くの人が額に汗して働いて、君の分まで税金を納めているからだよ」すると、彼はこう言い返しました。

「ごみ収集が好きな人もいるし、道路や橋を造るのが好きな人もいると思う。みんなが自分の好きなことをしても社会は回ると思う」

林先生は答えました。

「趣味で道路や橋を造った人に誰がお金を払うと思う？みんなが幸せになるサービスだけど、それには誰もお金を払わないよ」

法律を「ルール」に、社会のシステムを「ゲーム」にたとえた青年が言いました。

「僕は、このルールでゲームをやるって一言も言ってないのに、いつの間にか参加させられているのが気に入らない」

林先生はこう言い放ちました。

「嫌ならこの国を飛び出していけばいいんだよ」

彼らと向き合う林先生の姿勢は一貫していました。彼らが自分で選んだ生き方に対しては否定しませんでした。愚痴や不満に対しては厳しく切り捨てていました。結局、若者たちは必死に正しいと思う答えを言っていたようでしたが、その言葉は、誰も納得させることはできませんでした。

がんばって勉強してきた彼らにとって欠けていたものは何だったのでしょうか。彼らが言っていたことは自分の都合のよい面はあるものの「正解」だったかもしれませんが、しかし、社会で要求される「納得解」ではありませんでした。これは正解のみを求めてきた教育の限界のようなものを感じます。そう考えると、今後は、まさに人間を育てる真の教育が問われてきます。確かに期待と不安が入り交じりますが、冒頭で述べた「ワクワク感」を持っているかどうかにつながってくるようです。やはり、私たちの営みは、未来に対する期待と不安を隔てる溝を少しでも埋めていくためのものでありたいと思います。そういう意味でも勉強はワクワク感を持ってやりたいものです。正解がはっきり見えていないもの、未知のものにチャレンジし、努力していくことは、不安もありますが、期待と希望に満ちた「ワクワク感」を持たせます。



1・6年のベア学級交流